

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	中国の「応試教育」についての研究
Author(s)	許, 曉萃
Citation	HABITUS , 26 : 38 - 52
Issue Date	2022-03-20
DOI	
Self DOI	10.15027/52147
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00052147
Right	
Relation	



中国の「応試教育」についての研究

許 曉 萃

(広島大学大学院文学研究科博士課程後期 3 年)

目次

はじめに

- 1、「応試教育」の起源
- 2、社会の試験に対する考え方の変遷
- 3、社会背景からみる「応試教育」
- 4、文化的価値観からみる「応試教育」
- 5、親と学校の教育価値観からみる「応試教育」

おわりに

はじめに

中国は猛烈な学歴社会である。現在、中国では、高学歴を得るために、激しい進学競争が起こっている。この状態は、受験戦争と呼ばれる。大学受験を目指す「応試教育(受験教育)」は知育を偏重し、発達ための基本的な知識、方法、能力、価値観などの育成を軽視しているので、この教育のあり方が社会的に議論されている。本論はまず「応試教育」の起源——科挙を紹介し、歴史的観点から問題の掘り起こしを行う。次に、中国における試験文化の変遷と変質を論じ、「応試教育」が生み出されてきた過程をたどる。そして、階層社会の歴史と現状の考察を通し、「応試教育」が長年にわたって続いている理由を述べる。最後に、儒教の「大一統」という文化的価値観や親と学校の教育価値観から、「応試

教育」の趨勢を助長する原因を分析する。

1、「応試教育」の起源

鍾啓泉と崔允灝は『アンバランスからバランスまで：素質教育の課程評価体系についての研究（从失衡走向平衡：素質教育課程評価体系研究）』¹⁾において、中国の科挙が「応試教育」の起源であると考えている。科挙は隋の文帝の時代（598年）から始まった。これは家柄や身分に関係なく誰でも受験できる公平な試験であった。この試験を通して、才能ある個人を官吏に登用することができる。従って、科挙は当時としては世界的に見ても非常に革新的であった。科挙は隋から清（1905年）までの間、それぞれの時代において効力を発揮しており、重大な意義を持っていた。一方で、科挙は試験を偏重し、試験の内容と形式が制約されており、人間の精神と思考にひどく傷を与え、教育の本性を裏切るものとされていた。次に、このような科挙の弊害の原因を説明する。

第一に、科挙試験問題の範囲は儒家の古典に限られており、受験者は儒家の古典の範囲を超えるものを読む必要はなかった。それゆえ、教育の内容は四書五経だけであり、実際の生活に役立つ学問を含まなかった。例えば、明や清の時代では、試験内容は四書五経を八股文という決められた様式で解釈するよう制約されていた。これにより、受験者の主体性が保守的な教育内容に束縛された。このような教育は学生の興味を全く考慮しておらず、創造力を潰していた。

第二に、試験の評価標準は厳格すぎた。科挙の競争率は非常に高く、時代によって異なるが、最難関の試験であった進士科の場合、最も高い時は約3000倍であったという。科挙は家柄や身分に関係なく誰でも受験できるが、合格できたのは極少数であった。また、最終合格者の平均年齢も、時代によって異なるが、おおむね36歳前後と言われ、中には曹松(中国晩唐の詩人)などのような70歳を過ぎてようやく合格できた例もあった。受験者の大多数は一生をかけても

合格できず、経済的事情などの理由により受験を断念する者、過酷な勉強と試験の重圧に耐えられず精神障害や過労死に追い込まれ、中には失意のあまり自殺する者も少なくなかったという。

第三に、教育の目標が変質したことにある。科挙が始められたのは、文帝が優秀な人材を集め、実力によって官僚を登用し、自らの権力を確立するためであった。それゆえ科挙は優秀な人材を選抜することを重視し、当時の教育もそれに合わせ優秀な人材を育むという目標を立てた。また、科挙は民衆の側からすると、官職の地位と収入が直結しており、科挙に合格し官吏となることが、貧しい者でも可能であるため、時代が下がるにつれて個人の才能で社会的地位と財産を築く、確実な手段となっていた。こうして、科挙制度の下での教育は自らの独立性を失い、利益を得る手段となり、試験に合格するのが教育の目標になった。

以上が科挙の弊害である。清末の 1905 年、科挙が廃止された。しかし、科挙が廃止された以降も、この弊害は残り、中国の教育にマイナスの影響をもたらしている。

2、社会の試験に対する考えの変遷

科挙制度が廃止された後、中国は後科挙時代に入る。鍾によると、この「後」は時間を意味するだけでなく、近代以降の科挙の悪影響が新しい試験制度に残っているということも意味する²⁾。

1905 年から 1945 年の間は、科挙制度が廃止されたことにより、中国はしばらく全国统一進学試験を実施していなかった。それゆえ、受験を重視する傾向にあった試験文化が体制の基盤を失ってしまった。一方、近代以降、中国は外来の教育思想の受容と新文化運動の影響により、新しい形式の学校が創立されると同時に、現代の教育制度も生まれた。それによって、学校教育と試験の関

係が新たに作られ、試験が変質する状況も改善されていった。即ち、科挙教育と異なった目標と内容を持つ癸卯学制³⁾と壬戌学制⁴⁾が登場し、それらによって、現代の中国の学制の枠組みが確立されたのである。また、この二つの学制が、試験文化の転換として、重大な意義を持っていた。具体的には、普通教育と職業教育が同時に行われ、教育の目的が「学而優則仕」⁵⁾を重視することから技術を培うことへ転換したことである。また、アメリカの教育学者モンロー、デューイ、中国の教育学者蔡元培、陶行知などのような革新主義の教育者たちが新しい現代教育思想をもたらし、教育実践の変革を起こした。例えば、生活教育⁶⁾、農村教育、民衆教育⁷⁾などは新しい教育思想であり、これらは現代社会の発展に応じて、人々に深く教育の本質を理解させ、それまでの教育に不足していたものを気づかせていった。

1952年、中国は全国統一の試験制度である高考を確立した。しかし、1966年から1976年の間は、文化大革命の影響により、高考は行われなかった。文化大革命終息後の1977年10月、教育部門を担当した鄧小平を中心とする党中央の指導の下で国務院は「大学入試に関する意見」(《关于1977年高等学校招生工作的意見》)を公表し、「全国大学統一入試テスト」(高考)を再開することを正式に決定した。これにより、10年間にわたって中断していた同テストは1977年に再開された。1977年の普通大学⁸⁾の学生数は62万5000人に増加したが、大学進学率は1%に過ぎなかった。しかし、この大学入試の再開は、受験者たちに自信と希望を与え、中国の教育改革と発展を推し進めた。鄧小平は「大学入試に関する意見」の中で、学生を募集する時に、主に以下の二つの評価標準を重視することが必要であると強調した。第一に、政治審査(人の政治上の行いや記録に関する審査)。例えば、中国の政治についての知識をよく備えていること、社会主義を愛していること、労働を愛していること、規律を守っていることなどである。第二に、優秀な者を選んで採用するということ。しか

し、第一の評価標準には曖昧性があるため、第二の評価標準（つまり、試験の点数）は第一のものより重視されていた。その結果、中国の高考は点数を重視するという状況が長期的に続いている。

高考が回復して以来、試験を重視する風潮が続いていた原因は上述の評価標準にあった。そして、国家が重点学校⁹⁾を創立したこともこの傾向に拍車をかけた。鄧小平は、高等教育機関、特に重点大学は科学研究において国の重要な戦力であり、改めてその認定をしなければならないと指摘し、国務院は1978年2月、「全国重点高等教育機関の回復と適切な運営に関する報告」を承認した。これにより、文化大革命期に失われた指定を回復した従来の重点大学と新たに重点大学に追加された大学を合わせ、1979年末の全国の重点大学は97校となった。また、1970年代末に再編された中国の学校体系では、北京大学を始めとする重点大学を頂点として大学から小学校までそれぞれに重点校と一般校とが並存するシステムが採用された。重点学校制度が存在する限り、親は当然のことながら我が子をできるだけよい重点学校に進学させようとする。また、重点学校も評価を上げるためにできるだけ成績の良い子を受け入れようとする。この点においては学校と親の思惑は一致する。そのため、重点学校への進学をめぐる熾烈な受験戦争が繰り広げられた。

そして、1990年代になると、鄧小平は「南巡講話」¹⁰⁾の中で、社会主義の体制下でも市場経済を導入し、経済発展を進めることが可能であると提唱した。このような経済には、多様な中核人材が必要であるため、試験の種類と頻度が絶えず増加している。また、学校においては、進学率は教師や学校の名誉などと密接な関係を持っている。このため、学生たちは試験のために勉強し、教師たちは試験のために知識を教えることになる。その結果、社会一般に、試験を重視する現象が生み出されてしまった。

これまで見てきた後科学時代以降の試験を重視する傾向から派生する変化に

より、教育に次の三つの特徴がもたらされた。第一に、高考を重視するあまり科挙より試験勉強が減るところか、ますます甚だしくなっている。受験生は、朝から晩まで勉強している。勉強時間を確保するために、親が学校の近くにアパートを借りることも珍しくない。また、高考の時期になると、各地がある種の緊張感に包まれ、都市部では、受験生が試験会場に間に合うようにパトカーが先導することもあり、交通機関やホテルなどが高考の受験生に対し特別な配慮をすることもある。第二に、入試問題はある意味、「教学大綱」のようなものであるので、受験生と教師は過去問を分析しなければならない。その結果、学校の教育は試験によって影響を受け、即ち学校が試験のために存在するかのようになる。第三に、頻繁に試験に参加することで、多くの学生たちは成績だけで学習成果を評価され続ける。勉強への意志はもはや自らの内部からの知識欲ではなく、ただ試験で良い成績をとるために終始している。それゆえ、学生は自主的に学習能力を高めることができない。

3、社会背景からみる「応試教育」

現在、中国において「応試教育」は議論されているが、その存在には合理性がある。社会背景から見れば、中国社会を取り巻き、不合理な階級意識と社会移動によって、「応試教育」は長期的に存在している。

中国の学者許紀霖は『階層社会：応試教育の社会基礎(等級社会：応試教育的基礎)』¹¹⁾の中で、「階層社会には、世間に認められ、形式的で合理的な選抜制度が必要である。この選抜制度によって、社会の低層にいる秀才は社会の高層に入る機会を得て、希望を見て、マイノリティにならない。古代の中国では、この選抜制度は科挙であり、現在においてこの選抜制度は中考(高校入試)、高考、大学院入試などの様々な試験によって構成される」と述べている。この社会背景については、二つの問題を検討しなければならない。第一に、長期的に

見ると、中国社会における社会移動はどのような方向を向かうのか。第二に、社会移動を促す選抜制度はどのような合理性を持つのか。勿論、この二つの問題は階層社会の歴史、現状と深いつながりを持っている。

まず、中国社会における社会移動の方向についての問題を歴史的な観点から検討する。最初に、未開の社会において、部落の酋長の地位を争奪するために、部落のメンバーは争いを起こしていた。そして、階級社会の時代に入ると、私有財産制と特権階級が生み出されたことによって、社会の低層にいる人は権力・財産・声望などのために、社会の上層に移動していった。社会は、政治特権によって統治者と被統治者に分けられ、分業によって頭を使う人と労力を使う人に分かれ、財産を占める状況によって貧しい人と金持ちの人に分かれ、道徳的修養によって君子（筆者註：徳高く品位が備わった人）と小人（筆者註：徳がなく卑しい人）に分けられた。こうした階級対立は中華人民共和国の建国によって打ち破られた。しかし、それから数十年の発展の間に、社会階層は全体的に変わることになる。即ち、階層が社会的地位によって決定されたのは 70 年代以前のことである。その後展開される市場経済体制では、階層が職業・財産によって決定されることになった。社会主義市場経済の初期には、新社会人への審査システムが不十分であったため、ポジションに相応しい学歴を取るだけで新社会人になることができた。このような傾向によって、社会には、学歴を過度に重視するという問題が生み出された。この問題は、ある程度、中国の教育が「応試教育」に向かうことを煽り立てた。

次に、社会移動を促す選抜制度についての問題を検討する。古代以来、中国には社会移動を可能にする様々な選抜制度がある。例えば、封建社会に科挙があり、現代社会には主に高考、中考及び公務員試験、司法試験、教員採用試験などがある。古代において、科挙は世界的に最先進的、公平的、科学的な選抜制度であった。例えば、科挙は全国統一試験制度を採用し、段階・科目（時代

によって、試験の段階・科目が違っていた)を分けて試験を行っていた。最も重要なのは、科挙は以前の選抜制度より公平性を持っていたことである。原則的に、貧しい者でも科挙を通して社会的地位と財産を築いて、貴族と同等になる機会があったのである。約 1300 年間にわたって行われた科挙は多くの人材を選抜し、社会の低層にいる人が上層に入ることを促していた。現在、高考は科挙のように多くの学生(特に貧しい学生)に「よく勉強すれば、社会の上層に入る可能性がある」という大きな約束を与える。高考は 12 年間の在学の成果を測り、その後の運命を左右するものであるといっても過言ではない。毎年、約 1000 万人の学生が高考を受けており、大学に行くことが自分の人生を変える唯一の方法だと人々は信じている。一方、学校も利益を得るために、学生が高考で良い成績をとることを望む。また、親たちは子どもの立身出世を望むために、子どもが高考で成功することを期待する。それゆえ、学生、教育者、親たち及び社会一般は高考を重視することになる。

では、なぜ公正な高考は学校に進学率の高さのみを一面的に追求させたのだろうか。原因は二つある。第一に、現在の中国社会の階層分化の不合理性である。特に職場では、学歴によって、職種・収入・処遇が違っている。よい学歴を獲得しないと厳しい競争社会で十分に高い所得や地位が得られないという確信が広まりつつある。それゆえ、学校は学生を社会の上層に入らせるために、学生の試験競争力を重視する。第二に、中国の教育構造の不合理性である。職業的技術教育の発展が遅れているため、多くの学生は 9 年制義務教育を終えた後に、進学を決める。また、教育の機会均等が確保されておらず、教育資源の配分に不合理性があるため、各地域の学校の発展には格差がある。そして、多くの学校は進学率を追求し過ぎて、学生の総合的な能力の養成を重視せず、試験のための教育を行っている。

一面的に進学率を追求する「応試教育」は、試験の形式には公平性を維持で

きるが、実際には、少数の学生の成功だけを重視するので、その意味で、新たな格差や不公平性をもたらすことになる。その結果、「応試教育」はこれらの成功した学生の創造力、コミュニケーション能力などの大切なものを失わせる。一方、国家の立場から見ると、不合理な社会の階層分化が今後も進めば、「応試教育」は発展し続けることができるのである。

4、文化的価値観からみる「応試教育」

前漢の学者董仲舒は、武帝の建元元年に行った賢良対策の中で、儒家以外の諸子百家を排斥して儒学を国家教学として据えるよう献策した。漢武帝はこれを採用した。この政策を採用した後、春秋以来の活発な学術交流と思想の自由という局面が終結された。漢武帝の紀元前 136 年から後清朝の崩壊に至るまで、儒教は歴代朝廷の支持を得、政治権力・利益と一体となって中国の社会・文化の全般を支配してきた。儒教の経典は唯一の合法的、権威的な試験内容を提供したが、約 1300 年間にわたって行われた科挙教育時代において、教育の内容と形式は「大一統」¹²⁾という文化的な価値観によって日増しに生命力を失っていった。まず内容面については、三皇五帝¹³⁾と儒教の思想から後の四書五経は法的な教育内容になった。その原因は、統治者が統一的な試験によって人材を選抜するだけでなく、知識人の思想を弾圧することを通して政治の安定を維持したことにある。長期的には、強制的な統一試験内容は知識人に「唯上」¹⁴⁾、「唯書」¹⁵⁾という観念を形成させた。その結果、この観念は「応試教育」と変質した試験に一番目の法則を提供した。即ち統一的な試験内容は同一の教育内容を決めたということである。そして、形式面については、学習者たちは儒教の経典を機械的に丸暗記するだけであり、自分の創造力、探究の能力などを十分に発揮しないようになった。この風習は「応試教育」と変質した試験に二番目の法則を提供した。即ち統一的な試験標準は学習者の認識の同一化をもたら

したということである。中央集権的な教育制度を採用していた間、教育の内容と試験の標準は「一綱一本」(筆者註：全国に、統一的な教育大綱と教科書を使う)という政策に制限されていたので、教師と学生たちは自由に自分の能力(創造力、探究の能力など)を発揮することができずにいた。

要するに、過去の秀才、挙人(筆者註：受験生の呼称)も、現在の小・中学生も、勉強の最終目的は少し違っているが、目の前の目的は試験に合格することである。試験に合格するために、学生たちは教科書の知識を機械的に丸暗記するだけになり、創造力・実践能力などを失ってしまうのである。この文化的価値観は「応試教育」の趨勢を助長する。

5、親と学校の教育価値観からみる「応試教育」

中国における伝統的家庭教育の考えの中に、「望子成龍」¹⁶⁾というエリートを崇拝する意識が存在する。一人っ子時代の到来に伴い、以上のような意識の下で、親は子どもの出世に高い期待を抱き、金銭や時間、精力を過度に投入し、子どもに勉強を押し付ける傾向が強い。一方、この意識に対応して、学校は英才教育を行っている。この教育の下で、少数の学生は社会のエリートになり、多くの学生はエリートへの道に失敗してしまう。しかし、親は子どもの立身出世のために、学校は良い成績を持つ学生を培うために、同じ戦線に立ち、「応試教育」のために戦うのである。親と学校はエリートを崇拝する意識に影響されていたため、子どもの成績を盲目的に追求し、子どもの自主性と自立性などの能力を軽視してしまった。それゆえ、私たちは「応試教育」を批判する前に、社会にエリートを崇拝する意識が存在することを反省しなければならない。

おわりに

本研究は、まず「応試教育」の起源である科挙について述べた。当時、科挙

は公平な試験であり、隋から清までの間、各時代において効力を発揮していた。一方、科挙は受験者に弊害をもたらした。例えば、受験者の主体性が保守的な教育内容に束縛されるため、受験者の創造力が潰されてしまった。そして、科挙の評価標準は厳格すぎたため、極少数の受験者しか合格することができなかった。また、科挙は民衆の側からすると、官職の地位と収入が直結しているので、利益を得る手段になってしまった。

次に、中国における試験文化の変遷を考察した。科挙制度が廃止されて以降、1905年から1945年の間は、中国は全国統一進学試験を実施しなかった。一方、近代以来、中国は外来の教育思想の受容と新文化運動の影響により、新式学校が建設されると同時に、現代教育制度も生まれた。1952年、中国は全国統一に試験制度——高考を確立した。しかし、1966年から1976年の間は、文化大革命の影響により、高考は行われなかった。文化大革命終息後の1977年、高考が再開された。試験の点数で受験生を評価するというのは当時の評価標準の一つの特徴であった。そのことをふまえるならば、中国の高考は点数を重視するという状況は古代から長期的に続いているといえる。また、国家が重点学校を創立したことにより、重点学校への進学をめぐる受験戦争が激しく繰り広げられた。1990年代になると、中国は市場経済を導入した。このような経済には、多様な中核人材が必要であるため、試験の種類と頻度は絶えず増えている。その結果、社会一般に、試験を重視する現象が生み出されてしまった。

そして最後に、中国の社会背景・文化的価値観・親の教育価値観を通して、「応試教育」の発展を考察した。第一、中国の社会背景から見ると、不合理な階級意識と社会移動によって、「応試教育」は長期的に存在している。第二、科挙が行われていた時期に、強制的な統一試験内容は知識人に「唯上」、「唯書」という観念を形成させたことと、学習者たちは儒教の経典を機械的に丸暗記するだけであることは、「応試教育」と変質した試験に二つの法則を提供した。即ち、

統一的な試験内容は同一の教育内容を決め、統一的な試験標準は学習者の認識の同一化をもたらした。それによって、教師と学生たちは自由に自分の創造力、探究の能力などを発揮することができない状況となった。第三、親と学校がエリートを崇拝する意識に影響されていることは、「応試教育」の趨勢を助長する。彼らは子どもの成績を盲目的に追求し、子どもの自主性と自立性などの能力を軽視してしまった。

以上、「応試教育」の歴史と背景について考察してきた。ここで捉えた「応試教育」の特徴と問題点をふまえた上で、今後、中国における教育の改革の方向を模索する。

註

- 1) 鍾啓泉、崔允漭『アンバランスからバランスまで：素質教育の課程評価体系についての研究（从失衡走向平衡：素質教育課程評価体系研究）』、経済科学出版社、2014年5月。
- 2) 同上、30頁。
- 3) 中国最初の近代教育の学制「欽定学堂章程（壬寅学制）」は施行されなかったため、中国で初めて施行された学制は「欽定学堂章程」を基礎に改訂した1904年公布の「奏定学堂章程」、一般的には「癸卯学制」と呼ばれる。
- 4) 壬戌学制は、中華民国北京政府期の1922年11月1日に制定された学制である。正式名は、学校系統改革案である。この学校系統改革案は、大總統令として公布された。中国近代教育史研究ではよく知られている学制である。
- 5) 学んで余力があるならば役人になって仕えるということ。
- 6) 教育計画を、学習者の興味や日常生活経験を中心に組織し、学習者の主体的行動、生活を基本的な学習方法とし、学習者を社会の生きた生活者に形成していこうとする教育。その真髄は J.ペスタロッチの「生活が陶冶する」という言葉にこめられている。そのほか J.-J.ルソー、J.デューイなどがその源流と目されており、「生活」をどう定義するかによっ

て生活教育の内容、方法も異なる。日本でも大正時代に興隆した新教育運動の一環として生活教育が唱道され、1930年代の後半から40年代にかけて生活綴り方運動が展開された。

7) 学校教育以外の領域において組織される教育・学習活動の総称であって、ときにひろく文化活動やスポーツ活動も含まれる。社会教育という用語は日本独自のものであって、欧米では一般に adult education(英語), Erwachsenenbildung(ドイツ語), éducation populaire(フランス語)など成人教育、民衆教育の語が用いられる。近代以降の社会教育をみると、国家による民衆教化に抗して、社会的に自立した成人や勤労青年をその主体とし、自己教育活動をその本質ととらえようとする思想と実践が展開されてきた歴史がある。

8) 普通大学は国家の定める設置基準によって設立され、全国普通大学統一テストに合格した高校卒業生を対象とする全日制の大学である。普通大学は「本科大学」、「専科大学」、「大学院教育」に分類される。

9) 国家重点大学は、中華人民共和国（香港・マカオ地区を除く）の大学のうち、権威ある大学であると政府が認定し、予算の優先配分などの支援を行うものとして、設置者の別を問わず選定された大学のことである。正式名称は中華人民共和国国家重点大学である。単に重点大学ともいう。

10) 南巡講話（なんじゅんこうわ）とは、鄧小平が1992年1月から2月にかけて武漢、深圳、珠海、上海などを視察し、重要な声明を発表した一連の行動。

11) 許紀霖「階層社会：応試教育の社会基礎(等級社会：応試教育的基礎)」、『内蒙古教育』、2010年第3期。

12) 「大一統」とは、紀元前に成立した儒教の経典『春秋公羊伝』の言葉であり「一統を尊ぶ」という意味である。元々は、中国の社会安定、幸福追求、政治聡明などを意味したものであった。その後の施政者により、中華の文化を有するところは中華民族とされ、中華の歴史を有する土地を中華の土地とする思想に切り替わった。中国は秦の始皇帝以来、中央集権の専制支配が出現した。この政治安定下で中国文明は栄え、天下の中心となり、人々の憧憬の的となった。その中で、宗法一体化という大一統全機構を内蔵し、民族統一、文

化統一、領土統一が大一統であると指摘する。

13) 三皇五帝は、古代中国の神話伝説時代の 8 人の帝王である。三皇と五帝に分かれ（誰が該当するかについては諸説ある）、三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされ、理想の君主とされた。

14) (正しいかどうかを問わず) ただ上の指導者の考えに盲従すること。

15) 書物に書かれていることを盲信すること。

16) 子どもが学業でよい成績を取め、社会で成功することを望むこと。即ち子どもの立身出世を望むこと。

Consideration about Chinese examination education

Xiaocui Xu

Graduate School of Letters (Doctor's Degree Program),

Hiroshima University

Currently, there is fierce competition in the higher education sector in China. This condition is called an “examination war.” Examination education aimed at university entrance exams emphasizes intellectual education and neglects the development of basic knowledge, methods, abilities, values, etc. In this paper, I first introduce the origins of examination education, namely the Imperial Examination and examine the problems from a historical perspective. Next, I discuss the transition and alteration of the Chinese examination culture and trace the process of the creation of examination education. Then, by considering both the history and current situation of the hierarchical society, I explain why examination education has continued for many years. Finally, I analyze the causes that promote the trend of examination education from the perspectives of the cultural values of Confucianism, *Dayitong* and the educational values of parents and schools.